

現代中国語における“被”構文と主題文について — 「V + 身体部位 N」形式の再帰表現を中心に—

日下部 直美

0. はじめに

日下部 2008a, 2008b では、現代中国語における再帰表現¹⁾の他動性の高低と、その意味的特徴と関連した統語的制約について分析を行った。日下部 2008a では、再帰表現における他動性の高低を示し、それによって「 $N_1 + 給 + N_2 + V + 身体部位 N$ 」の領属先が N_1 のみである場合と、 N_1 及び N_2 の二通りになる場合があることを指摘した。また、日下部 2008b においては、再帰表現における他動性の高低が身体部位 N の定語の位置に現われる“自己”との共起と関連しており、更にはその行為における身体部位に対する「客体化」とも関係していることを明らかにした。

本稿は、日下部 2008a, 2008b と同様に、再帰表現の他動性の高低が、その意味的特徴に基づいて如何なる統語的制約を有しているのかという観点に立脚して分析を行うものである。ここでは、特に「 $V + 身体部位 N$ 」形式の再帰表現における受身文「 $身体部位 N + 被^2) + N_a + VP$ 」と身体部位 N を主題とした「 $身体部位 N + N_a + VP$ 」の二つの形式を取り上げる。

(0-1a) 胡子被我刮了。[髭は私によって剃られた (→私が剃った)]^{3) 4)}

(0-1b) 胡子我刮了。[髭は私が剃った]

上に挙げた (0-1a)、(0-1b) の差異は、“被”が存在するか否かのもたらす構

文上の差異である。以下、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現を用いた両構文の成立の可否について分析し、「再帰」という意味的特徴に関連した統語的制約について考察を行う。

1. 再帰表現と他動性の高低

現代中国語における再帰表現の他動性の高低について、日下部 2008a:122 では以下の三つのパラメータを設定した。

- (i) 動作主の意志性 (VOLITIONALITY)
- (ii) 対象物は変化を被る
- (iii) 対象物の被影響度 (AFFECTEDNESS OF O)

(i)、(iii) は Hopper and Thompson 1980、(ii) は ヤコブセン 1988 の基準を導入したものである。更に、以上の特徴が多く備わっているものは他動性が高く、少ないものは他動性が低いと判断した上で、再帰表現を他動性の低いもの (A)、中間に位置するもの (B)、他動性が高いもの (C) の三つのグループに分類した。

- (A) 招手 [手を振る、手招きする]、抱胳膊 [腕組みをする]
 眨眼 (睛) [瞬きする]、歪嘴 (巴) [口をゆがめる]
 伸腿 [足を伸ばす]、点头 [頷く]
- (B) 梳头发 [髪をすく]、洗手 [手を洗う]、刷牙 [歯を磨く]
- (C) 剪指甲 [爪を切る]、刮胡子 [髭を剃る]、拔牙 [歯を抜く]、
 切手指 [指を切る]

上の三種類の行為は全て動作主が自分自身の身体部位に対して行うものであ

る。まず、(A) 類の行為の“眨眼 (睛)”については、対象物である身体部位の変化及び身体部位の被影響度は感じられない。“点头”、“招手”、“抱胳膊”、“歪嘴 (巴)”、“伸腿”については、身体部位の空間的位置に変化が生じているが、身体部位の被影響度はみられない。

(B)、(C) 類の行為は、いずれも身体部位の状態が変化するものである。この「状態変化」という特性は、(B) 類においては、動作主が身体部位に対して働きかけを行った上で、当該の身体部位の形状または表面の状態そのものを変化させるということである。(C) 類についても、身体部位が動作主である主体から「分離」しているため、身体部位の状態が変化しているといえる。従って、「状態変化」という特性は、「空間的位置の変化」より他動性が高いと判断できる。更に、(B) 類の場合は、“刷牙”、“洗手”などのような身体部位の表面及び形状の変化のみであるため、対象物である身体部位の被影響度は部分的であると考えられる。(C) 類については、“拔牙”、“切断手指”といったように同じ身体部位に対する行為であっても (B) 類とは異なり、身体部位が「分離」し、動作主である主体から切り離された別個のモノとして認識されるため、対象物である「歯」、「指」等といった身体部位そのものの被影響度は全体的であると見なすことができる。以上のことから、(B) 類と比べると (C) 類の方が他動性が高いといえるため、上述したように (A) ~ (C) 類の他動性は、(A) → (B) → (C) の順に高くなると考えられる。⁵⁾

本稿では、上に挙げた (A) ~ (C) 類の再帰表現の他動性の高低が、身体部位 N が主語の位置に立つ受身文の一つである「身体部位 N + 被 + Na + VP」と、身体部位 N が主題となる「身体部位 N + Na + VP」の形式との差異に影響を及ぼしているという観点から、その成立の可否について分析を行う。

2. “被” 構文と主題文

まず、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現における「身体部位 N + 被 + Na

+ VP」と「身体部位 N + N_a + VP」の両形式で表される具体例として、(0-1a)、(0-1b) を再掲する。

(2-1a) 胡子被我刮了。(= (0-1a))

(2-1b) 胡子我刮了。(= (0-1b))

上に挙げた (2-1a) の形式は“被”構文、(2-1b) は主題文である。しかしながら、この二つの名称は同一のレベルにおいて用いられているものではない。“被”構文は統語論の領域において命名されたものであり、主題文は談話文法概念に基づいたものである。

主題文は「主題（話題）＋説明（評言）」という構造であり、“被”構文も同様の構造になっている。即ち、“被”構文も主題文という範疇に含まれたものであるといえる。従って、以下のように主語の位置に立つ語の後にポーズを置くことができる。

(2-2a) 胡子 || 被我刮了。(同上)⁶⁾

(2-2b) 胡子 || 我刮了。(同上)

よって、本稿では考察の便宜上、「身体部位 N + 被 + N_a + VP」の形式を以下「“被”構文」（例文番号を a と表示）、「身体部位 N + N_a + VP」の形式を「主題文」（例文番号を b と表示）と称し、この両者を区別した上で分析を行う。

3. 「身体部位 N + 被 + N_a + VP」と「身体部位 N + N_a + VP」における容認度

本章では、1章で挙げた (A) ～ (C) 類の再帰表現を、「身体部位 N + 被 + N_a + VP」形式、及び「身体部位 N + N_a + VP」形式において用いた“被”

構文と主題文を取り上げ、その容認度をみていく。インフォーマントには、身体部位Nが動作主自身のものであると想定した上で、動作主が“我”と“他(她)”の両者である場合において、非文(*) / かなり不自然(??) / やや不自然(?) / 自然(無印) かどうかを判断してもらった。

3.1 (A) 類の行為

まず、(A) 類の行為についてみる。

- | | |
|-------------------------|--------------------------------------|
| (3-1a) 手被 {*我/*他} 招了。 | (3-1b) 手 {*我/*他} 招了。 |
| (3-2a) 胳膊被 {*我/*他} 抱了。 | (3-2b) 胳膊 {*我/*他} 抱了。 |
| (3-3a) 眼睛被 {*我/*他} 眨了。 | (3-3b) 眼睛 {??我/??他} 眨了。 |
| (3-4a) 嘴被 {??我/??他} 歪了。 | (3-4b) 嘴 {??我/??他} 歪了。 |
| (3-5a) 腿被 {??我/??他} 伸了。 | (3-5b) 腿 {??我/??他} 伸了。 ⁷⁾ |

(3-1a) ~ (3-5b) で挙げたように、“被”構文・主題文のいずれも非文またはかなり不自然となる。一方、以下の“被”構文である(3-6a)は非文であるが、主題文である(3-6b)はやや不自然である。

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| (3-6a) 头被 {*我/*他} 点了。 | (3-6b) 头 {?我/?他} 点了。 |
|-----------------------|----------------------|

(3-6b) は動作主が“我”の場合は、以下の(3-6b)’のようなシチュエーションを設定すると自然な文となる。

- (3-6b)’ (AとBの間で、会議中に賛成するなら頷く約束をしたのにもかかわらず、Bが頷かなかったのをAが責めている)
A: 你为什么没点头? [どうして頷かなかったの?]

B: 头我点了呀。是你没看见。[頷いたよ。君が見ていなかったんだよ]

また、(3-6b) の動作主が“他”の場合も、同様のシチュエーションを設定すると自然な文として成立する。

(3-6b)” (A と C が会議中に賛成するなら頷く約束をしたのにもかかわらず、C が頷かなかったのを A が不満に思っており、そのことを B に話している)

A: 他怎么没点头? [彼はどうして頷かなかったんだろう?]

B: 头他点了呀。是你没看见。[彼は頷いたよ。君が見ていなかったんだよ]

このように A 類の行為において、(3-6b) の“点头”のみが成立する理由については以下のような統語的・意味的要因が考えられる。例えば、動詞“招”、“眨”、“伸”は後に賓語を欠いて、“*我招了”⁸⁾、“*我眨了”、“*我伸了”ということではできないが、“点”については、“我点了”[私は突つついた]が成立する。即ち、“招”、“眨”、“伸”といった動詞は、動作の対象との結びつきが強く、統語的に賓語が必須成分として現われなければならない。しかしながら、“点”という動詞は、本来は「突つつく」という意味であり、そこから「(指を差したり頭を動かしながら) 数える」という意味などにも用いられるため、動作の対象を必須成分として伴わなくても成立する。従って、“点”本来の意味から派生した「頭を上下に動かす」という意味の“点头”は、「身体部位 N + N_a + VP」の形式のように、動作の対象である身体部位 N と動詞を切り離して用いた場合でも自然な文になると考えられる。

3.2 (B) 類の行為

次に、(B) 類の行為の例を挙げる。

(3-7a) 头发被 {[?]我/[?]他} 梳了。

(3-7b) 头发 {我/他} 梳了。[髪は {私/彼} が梳いた]

(3-8a) 手被 {[?]我/[?]他} 洗了。

(3-8b) 手 {我/他} 洗了。[手は {私/彼} が洗った]

(3-9a) 牙被 {[?]我/[?]他} 刷了。

(3-9b) 牙 {我/他} 刷了。[歯は {私/彼} が磨いた]

上の (3-7b)、(3-8b)、(3-9b) の主題文は全て自然な文であり、問題なく成立するが、(3-7a)、(3-8a)、(3-9a) の“被”構文ではやや不自然となる。

(B) 類の行為は、動作主から対象である身体部位に対する影響度が高く、身体部位に状態変化が生じる場合であるため、(A) 類と比較すると、他動性が高い。この場合、身体部位の被影響度が高いことから、話し手が当該の身体部位の状態変化に対して観察可能となるため、対象である身体部位に視点を置きやすくなる。従って、主語の位置に立つ対象に視点を置き、その対象に対してどのような行為が行われ、そしてどのような状態になったかということを叙述・描写する“被”構文の構文的機能と合致する。しかしながら、1章で述べたように、(B) 類の行為の身体部位の被影響度は部分的であるため、後の 3.3 で考察する (C) 類の行為よりも状態変化を観察し難い。よって、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も単文ではやや不自然となってしまうが、以下のように文を補えば自然な文として成立する。

(3-7a)' {我/他} 的头发被 {我/他} 梳了, 手也被 {我/他} 洗了。

[{私/彼} の髪は {私/彼} によって梳かれ、手も {私/彼}

によって洗われた (→ {私 / 彼} は髪を梳いたし、手も洗った)]
 (3-9a)' 牙被 {我 / 他} 刷了, 所以 {我 / 他} 不吃了。

[歯は {私 / 彼} によって磨かれたから、食べないことにした
 (→歯を {私 / 彼} は磨いたから、…)]

(3-7a)' は、“梳头发”と“洗手”の両者が含まれた例文であり、(3-7a) と (3-8a) の“被”構文を用いたものである。これは、動作主が“我”、“他”のいずれの場合も自然な文として成立する。(3-7a)' は動作主の身体部位である“头发”と“手”を対比して述べている文である。即ち、話し手の視点をまず“我 / 他”の“头发”に移動させ、更に、そこから“被 {我 / 他} 梳了”という事態を描写し、次に“我 / 他”の“手”に視点を移動させた上で、“被 {我 / 他} 洗了”という事態を述べている。

また、(3-9a)' は、後に文を続け、シチュエーションに具体性を持たせることにより、自然な文となる。(3-9a)' の身体部位 N である“牙”はノーマークであるが、動作主が“我”または“他”であっても、シチュエーションによってどちらの身体部位かを問題なく認識することができることにより、自然な文として成立すると考えられる。

3.3 (C) 類の行為

最後に (C) 類の行為についてみる。

(3-10a) 指甲被 {我 / 他} 剪了。

[爪は {私 / 彼} によって切られた (→ {私 / 彼} が切った)]

(3-10b) 指甲 {我 / 他} 剪了。[爪は {私 / 彼} が切った]

(3-11a) 胡子被 {我 / 他} 刮了。

[髭は {私 / 彼} によって剃られた (→ {私 / 彼} が剃った)]

(3-11b) 胡子 {我 / 他} 刮了。[鬚は {私 / 彼} が剃った]

(3-12a) 牙被 {我 / 他} 拔了。

[歯は {私 / 彼} によって抜かれた (→ {私 / 彼} が抜いた)]

(3-12b) 牙 {我 / ?他} 拔了。[歯は私が抜いた]

(3-13a) 手指被 {我 / 他} 切了。

[指は {私 / 彼} によって切られた (→ {私 / 彼} が切った)]

(3-13b) 手指 {*我 / *他} 切了。

(3-12b) は動作主が“他”の場合にはやや不自然であるが、これも以下のようなシチュエーションを設定すれば自然な文となる。

(3-12b)' (虫歯で苦しんでいた彼が、2、3日学校を欠席している)

A: 他牙疼不知道怎么样了? [彼の歯痛はどうなったのかな?]

B: 啊, 听说疼的那颗牙他拔了。

[ああ、痛がっていたあの歯は、彼は抜いたそうだよ]

(3-13b) では動作主が“我”、“他”のいずれの場合も非文となる。インフォーマントによると、仮に“手指我切了”がいえるならば、この場合は動作主自身の指と自分自身との関係がかけ離れたものとして感じており、動作主自身の視点が事態の外に置かれ、そこから客観的に描写している場合であるという。しかしながら、「自分自身の指を切る」という行為は、身体に対して痛みを伴うものであり、動作主自身にとって強く関わりのある動作であるといえる。そのため、現実的な状況との抵触が生じてしまい、インフォーマントは非文と見なしてしまうと考えられる。これとは異なり、同様に痛みを伴う行為であっても、(3-12b)、(3-12b)' は成立する。これは、直前に「歯」についての発話が存在し、更には、「歯を抜く」という行為が治療のためであり、自分自身の「歯」

に対して客観的に抜歯すべき事態として捉えている。そのため、今は自分の身体の一部であっても、いずれ身体から分離してしまう存在として身体部位を客体化して捉えていることから、意味的な衝突が起こらず、自然な文になると考えられる。

一方、(3-13a) は“被”があることから、(3-13b) のように視点が事態の外ではなく、身体部位そのものである“手指”に置かれており、そこから“被{我/他}切了”という事態が描写されている。よって、動作主が“我”、“他”のいずれの場合にも問題なく成立すると分析できる。

4. おわりに

本稿では、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現において、「身体部位 N + 被 + N_a + VP」と「身体部位 N + Na + VP」の形式を取り上げ、両者の成立の可否について分析を行った。その結果として、他動性の低い A 類の行為においては、“点头”以外は主題文では成立せず、B 類では主題文はすべて成立するが、“被”構文はやや不自然となった。また、他動性の高い C 類では、“切手指”以外の主題文は成立することが明らかとなった。このことから、同じ行為であっても、用いられる形式によって中国語話者の視点が異なり、この視点の差異が身体部位 N を用いた再帰表現においても反映されていると考えられる。また、他動性の高低のみならず、動詞とその必須成分及び「再帰」という行為に対する中国語話者の認識においても、相互関係を有していると思われる。

注

¹⁾「再帰」とは、動作主が自分自身に対して行う行為を指す。仁田 1982 : 80 はこれを「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するといった現象」と定義しており、本稿でもこの定義に従う。

²⁾ 現代中国語における受身文のマーカ―として、“被”以外に“让”、“叫”、“给”など

が挙げられるが、本稿では“被”を用いた「身体部位 N + 被 + N_a + VP」形式の受身文のみを扱うこととする。

- ³⁾ 本稿の例文は全て作例であるが、いずれもインフォーマントチェックを受けている。
- ⁴⁾ 中国語の“被”の表す意味範疇は、日本語の受身を表す「レル/ラレル」とは一致しておらず、例文を日本語で表現する際に、「レル/ラレル」や動作主を導く「ニ格/ニョotte句」を用いて直訳すると、不自然な日本語になってしまう場合がある。本稿の例文訳は中国語を直訳したものであり、カッコ内にはそれに対応する自然な日本語を記してある。
- ⁵⁾ (A) ~ (C) 類の行為における他動性の高低の詳細な分析については、日下部 2008a を参照のこと。
- ⁶⁾ 例文におけるポーズは「||」で表す。史有為 1995 は、主語が主題である場合は、その後にポーズ及び語気詞を置くことができると分析している。主語と主題に関する問題については、本稿の主旨とは異なるため触れないこととする。
- ⁷⁾ インフォーマントによると、他人の足を伸ばす行為なら、以下のようなシチュエーションでは成立するという。

(二人の看護師が、体の不自由な患者のために全身を動かすリハビリ治療をしている)

A: 腿给他伸了吗? [彼の足は伸ばしてあげたの?]

B-1: ?腿我伸了。[足は伸ばしたよ]

B-2: 腿我给他伸了。[足は伸ばしてあげたよ]

上の (B-2) は自然な文であるが、(B-1) はやや不自然である。(B-1) のように単に“腿我伸了”というのみでは、患者を人として見なしておらず、単なる身体部位である足のみを取り上げて伸ばしたというニュアンスになる。従って、このような看護師と患者が存在するシチュエーションにおいては、(B-2) の方が適切であるという。

- ⁸⁾ “我招了”は「白状する」、「(犯罪などを)認める」といった意味の場合は成立する。しかしながら、“点”のケースとは異なり、この場合の“招”には原義である「招く」

という意味との間に連続性は存在しない。

主要参考文献

- 日下部直美 2008a. 「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『多元文化』8号 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻
- 日下部直美 2008b. 「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V + 身体部位 N」の形式を中心に——」『人文研究論叢』4号 星城大学
- 杉村博文 1984. 「処置と遭遇——“把”構文再攷」『中国語学』231号
- 杉村博文 1992. 「遭遇と達成——中国語被動文の感情的色彩」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版
- 仁田義雄 1982. 「再帰動詞、再帰用法——Lexico-Syntaxの姿勢から」『日本語教育』47号
- 望月圭子 1985. 「中国語における主語と主題」『言語文化研究』3号 東京外国語大学大学院言語文化研究会
- ヤコブセン, ウェスリー・M 1988. 「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』くろしお出版
- 胡裕樹 1982. 〈试论汉语句首的名词成分〉《语言教学与研究》第4期
- 杉村博文 1998. 〈论现代汉语表“难事实现”的被动句〉《世界汉语教学》第4期
- 史有为 1995. 〈主语后停顿与话题〉《中国语言学报》第5期
- 望月圭子 1986. 〈汉语的主题结构〉『中国語学』233号
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson 1980. Transitivity in Grammar and Discourse, *Language* 56:251-299.